



日独交流150周年
Jahre Freundschaft
Deutschland - Japan

公開シンポジウム

フンボルト理念の終焉？

——現代日本の大学教員の課題——

日時： 2011年5月14日（土）13:30—17:00

場所： 青山学院大学 総研ビル 9F 第16会議室

プログラム

司会 茂 牧人（青山学院大学教授）

【主題講演】

潮木 守一（元・桜美林大学大学院国際学研究科教授、
名古屋大学大学院国際開発研究科教授）

「フンボルト理念の終焉？——現代日本の大学教員の課題」

リスポンデント

西山 雄二	（首都大学東京准教授）
東方 敬信	（青山学院大学教授）
深井 智朗	（聖学院大学総合研究所教授）

- ◆13:30 主題講演
- ◆15:00 休憩
- ◆15:15 講演に対する応答
- ◆15:45 主題講演者とリスポンデントによるディスカッション
- ◆16:15 全体での質疑応答
- ◆17:00 終了

* 受付でプログラム・案内ほか、主催の研究プロジェクトの「研究報告論集」を配布致します。また、主題講演者・リスポンデントの近著を用意しております。

シンポジウム「フンボルト理念の終焉?——現代日本の大学教員の課題」へのお誘い

その昔、大学史や学問史など一顧だにしたはずもない同僚が、ある役職に就いてのち、その大学の公けの席では、「研究と教育」という台詞を呪文のように唱えておりました。その頃、正直、私もこの言葉の由来を知りませんでした。

いわゆる「フンボルト理念」に端を発するこの符牒が、長く久しい「意味論的飽和」の時を経て、なんとかの一つ覚えのように、これさえ言っておけば大学教員の通行手形として通用する、そうしたわが国の事情は、いまだに続いているのかもしれませんが。

本シンポジウムの主題講演者にお迎えする教育社会学者潮木守一先生は、科学史家中山茂先生を中心とする帝国大学史の研究グループに属され、その主たる成果たる東京大学史研究につながる、意味深い独自の京都大学史研究を問われ、また現代の大学教員に関わる多数の著作を著わしておられます。近著『フンボルト理念の終焉?——現代大学の新たな次元』(東信堂、2008年)は、近代的大学の模範となったベルリン大学のためのこの「フンボルト理念」をめぐる最近の批判的指摘(S・パレチェック)を取り上げ、あらためて世界の大学、とりわけわが国の大学における、この理念の受け止め方と、その現代的適合性を検討する、大学教員必読の書です。本シンポジウムでは、ドイツの近代大学史とも深い関係を有するわが国の大学の来歴と、これからのそのあるべき姿への、またそこで大学教員として奉職する者たちへの、潮木先生の批判的ご提言に傾聴しようとするものです。

この講演にたいする、学外からのゲストのリスポンデントとして西山雄二先生をお迎えします。西山先生は現代フランスの代表的な哲学者ジャック・デリダの『条件なき大学』(月曜社、2008年)をわが国に紹介され、2009年には東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」での共同研究の成果として、『哲学と大学』(未来社)を上梓されました。また、大学や人文学の現状と展望を問うドキュメンタリー映画「哲学への権利」を日本国内外で巡回上映され、討論会を行なっておられます(勁草書房より2月に刊行予定)。

また、青山学院大学に長く奉職され、私立キリスト教大学の建学の精神の立場から、新しい「教育人間学」を提唱しておられる東方敬信先生が、リスポンデントに加わって下さいます。

さらに、本プロジェクトを代表し、神学史と社会史の相関の視点から、ベルリン大学の意義を高揚した神学者ハルナックへの森鷗外の関心などを分析される、深井智朗先生がリスポンデントを務めて下さいます。

2010年は、ベルリン大学創設200周年の、また日独交流150周年の、記念の年でした。その意味でも、本シンポジウムでの学びは、時宜に合ったものであり、課題多きわが国の大学で「心ある大学教員」であろうとされる先生方に、有意義な研鑽の機会となることと確信しております。

研究プロジェクト「キリスト教大学における学問体系論」
代表 西谷幸介(青山学院大学教授)

<交通アクセス>



***本シンポジウムは入場無料です**

青山学院大学総合研究所 研究プロジェクト
「キリスト教大学における学問体系論」主催
在日ドイツ大使館「日独交流150周年
2010/2011」認定事業

<連絡先>青山学院大学総合研究所
電話: ダイヤルイン 03-3409-7472
URL: <http://www.ri.aoyama.ac.jp/>